

第23回国民文化祭 いばらき 2008

雨 Stone Cultural Festival 引の里と彫刻 2008

今月1日(土)～9日(日)、茨城県を会場に第23回国民文化祭・いばらき2008「常世の国 こくぶん祭」が開催され、桜川市では「ストーン文化フェスティバル」と「筑波嶺と万葉文化フェスティバル」の2つの文化交流事業が開催されます。

今月号では「ストーン文化フェスティバル」の一環として、9月28日(日)～11月30日(日)までの2か月間、大和地域(本木・大曾根・東飯田・阿部田地区)で開催されています。「雨引の里と彫刻2008」全42作品をご紹介します。

この作品展は今回で7回目の開催となり、大和地域の集落、田園、里山などの空間に作品を展示。その地域を期間限定の美術館と化し、来訪者の方々に作品と風景の調和を楽しんでいただければと企画されたものです。作品の展示場所は、作者自ら探し出し、土

地所有者や管理者の方のご協力を得て実施されています。

この秋、地図を片手に自然と触れ合いながら、里山アートを楽しんでみてはいかがでしょうか。

作品名	作者名(敬称略)
作品	作者のコメント



1 Lのあるかたち 2 山崎 隆

3 形というものはいろいろな関係が支えあっている。前がなければ後ろがあり、表面があれば内面があるというわけです。眼で見えないこともありますが、そんな支えあっている関係、この作品で表現したいと思っています。



1 ゴム

2 和田 政幸

3 選んだ場所は、林の中の木立が途切れている所です。屋内と違って、作品の大きさに制限ないので数多く作ろうと思いました。鉄と言っても車のボディに使われている様な薄い鉄板の貼り合わせです。薄鉄の柔らかい感じが表現できれば良いのですが。



1 MIDORI

2 宮沢 泉

3 ひたすら石に鑿を当てている。鑿を打つごとに石に表情が生じ、それに応えるように鑿をあてる。限りなく打つ、石片がはじけ飛ぶ。その先端には遠い昔の光景や未だ見ぬ光景が瞬いてる。



1 動きの生成

2 金沢 健一

3 鉄の角管に溝をいれることで工業製品としての無機質な直線から有機的な曲線が生まれる。林の中で、その鉄がどのような存在感を示すのか、一本の木に向かってその曲線を送らせる。



1 DOXAへの行列 08-09

2 金 鉦淑

3 始まりも終わりもない行列。人間の本質への欲望と完璧への信頼は、時には人を惑わす。



1 ぼくたちのきおく

2 いしばしめぐみ

3 そこがぼくたちのきおくでいつぱいになると、それはみずたまでいくんだ、つぎのきおくをうけいれるためにね。それでね、とんでいったみずたはやがてはじけ、ぼくたちのみらいにいろをつけはじめるんだよ。

1 植物のかたち「木の果実」



2 安田 正子

3 原木を前にすると、ほんの少し手を加えるだけで良いかたちが生まれそうに思うことがしばしばあります。そんな木を寄せて、ひとつの果実を作り出した。思いきって、解放された空間に置いてみました。

1 Circle



2 大槻 孝之

3 作品を設置する河川敷に立つと、まず感じられるのは、空の大きさと、筑波山や加波山に囲まれた、広々とした田園風景でした。これらの風景を作品の中に取り込むことで、その向こう側にあるものを顕現することができたのではないかと考えました。

1 緑を見上げ落葉を迎えるための柱／樹下の神託



2 戸田 裕介

3 何か特別な役割も無さそうに見えた場所では、春には心地よい風が新緑の枝を揺らし、夏には穏やかな木漏れ陽が、秋には落葉がゆつくりと舞っていました。私は、この場所で、密やかに繰り返される無為に、少し大きな声で讃歌を捧げます。

1 充実した空 (The full emptiness)



2 松田 文平

3 full emptinessとは、対極する事柄でありながら、自分の意識の置き場所によって、同一であると言えます。外から見た立場と、中から見た立場は、中も外も感じなくなってしまう心には、同一の立場として映るのでしょう。

1 A-0810



2 井上 雅之

3 自然物より「人」が作り上げたモノに強く惹かれる事がよくあります。土をロクロの上に乗せグルグルと廻す事も「人」の為せる業です。当たり前の高さですと湯呑や花入れになります。しかし、少しばかり度を超えるとか何やら「おもしろげ」な姿になります。

1 雲にのって帰る



2 大島 由起子

3 長い月日が作品をつくりまします。石は長い月日を受け入れてくれます。いかなる時も石は私を冷静に見つめています。私はそんな存在に支えられています。

1 場



2 平井 一嘉

3 今回展示させて頂くお屋敷の入り口の大きな樫と立派な樫の生垣の前のステージに小さな石を置いて見たら、どんな風に変わるか、変わらないか見てみたいと思っています。快く承諾して頂いた地主様に感謝しつつ作りましました。全体をご鑑賞下さい。

1 外延と内包量 XIII



2 佐藤 晃

3 背の高い樫が並ぶ緑に囲まれた屋敷の裏庭がある。大木は巨体を誇示する訳でもなく優しく境界を守っている様であった。内側から見上げると、枝は外へ向かって開かれ、葉の輪郭は空へと消えてゆく。この庭の中に、樹木や空と戯れる様な形を造りたいと思った。

1 遠い地平



2 岡本 敦生

3 広い大地の中にいて半身土に塗れながら、それでもなお行く先の見えない不安が付きまとう。でも、内に秘めた希望だけは失いたくないのだ。

1 水



2 高梨 裕理

3 畑の向こうに1本の大きな木。この辺りには大きな木が多くあります。ここに一瞬の動とその後の静を感じてみたいと思います。

1 陽だまりに向かう／丸まりながら休む／重なって暖まる



2 中井川 由季

3 何機かの遊具と桜の木、ゲートボール場、その小さな公園は、集落の真ん中にある。「公園」には、陽だまりが似合う。幸せのにおいがする。そんな私の個人的な思いと希望を、かたちに映して作ってみる、その公園に置いてみよう。場に似合うかな。

1 「風の色」のパズル



2 志賀 政夫

3 いつの日か人影が途絶え、静かに時の過ぎる日々。旧東飯田駅プラットホームには、刻まれた時間が過ぎて行く。わずかな色が、風に乗せて、振り向きもせずそつと置いて行く。私は、プラットホームに足をとどめていく。